
えすのはなし

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えすのはなし

【Nコード】

N3323J

【作者名】

はまな

【あらすじ】

僕（俺）はそのうち私とも言うようになる。小学校で出会った「ミズホ」は俺（僕）の悪魔であり、愛する相手になった。

人の想いに、不変不動なものがあるかどうか。あるとしたら、それは呪いである。私（僕と俺）はミズホと誓い合う。自分達は打ち勝とうと。

愛と愛じゃないもの、二人と二人じゃないものの人に対する想いの物語。十年間で彼らは「自らの想い」を無視して愛し合えるか。

0 囁くことのできない願い

0 囁くことのできない願い

「私は天才と話す疲れるんだ。どういふことか分かるかな、大抵の人は、天才と話すことに關して、疲れたりはしない。自分が天才と話したことに気がつかないか、奇人として避けるか憤怒にかられるか——そのどれかだよ。だから私がミズホと話して疲れるのは、少なくとも私はほんの少しだけ賢しらで、そっちが大いに賢しら、天才だつてことだ」

苦し紛れにそういつた彼の顔は、苦渋だらけだつた。苦味がへばりついている。深い吐息を彼が発する前に、私は自分の目の前に置かれたグラスを投げつけた。

アイスのダーズリンが入るにしてはやや分厚く重いガラスの容器放物線を描く前に額の中心にぶつかり、そしてその重厚さに似合わずあつさりと割れる。

中身はほとんど残つてはいない。解けかかった氷が机や椅子に散らばり、その上に濁つた色が滴る。

額を大きく切つて、彼はしかし動じていなかった。コップがぶつかる瞬間もほとんど動いていない。むしろそのために力が逃げる場所が無く、割れてしまつたのかもしれない。

彼は少しの間、息を止めたまま痛みに耐えて、それから落ち着いて言つてきた。

「俺はどうすればいいかな。投げ返せばいい？ そんなことできっこないけど」

軽く笑っている。一人称を二種類使う男。いつもは俺というが、何故か私と話すとなると時折変な丁寧語らしき口調が出たり、自分のことを私と言つたりする。彼自身もその奇妙さには自覚があるらしく、そういうことをしたときには大体眉をひそめるか息を大きく

吐く。

「対等じゃなきゃ戦えない？ 私に追いすがれなければこの先やっていけない？ だったらどうしたいの。この場で終わりにしたいなら、今度はテーブルでもレジでも投げて終わりにしてあげるけど」周囲のどよめきが強くなる。ここの喫茶店は地下街にあるために小さい。客も店員も既に事態に気がついていて。

彼は一瞬、泣きそうになった。いつも平然とした顔を崩さないために、目立った変化に思える。

だが彼は泣かなかった。彼が泣いたことは一度しかないのかもしれない。何年か前の電話の向こうでの、ただ一度きり。

「匹敵できない、愛されることが出来ない、ミズホを心変わりさせることが出来ないのは、そのせいじゃないのか。あらゆる巡り合わせが悪すぎる。苛まれている……そういうことばかり考える」

「軟弱者」

硬く言い放つ。彼は鼻で笑ったようだった。

「分からないのはミズホだ。何でこんなこと、続けていられる。ミズホは俺なんかと違って」

拳を作ったたたきつける。目と閉じず握りこんで肩を引いて腰を回す。引きつるような痛みが指の関節をしびれさせた。

彼は椅子ごと地面に倒れこんでいた。昏倒したのか、動きはない。私は逃げた。硬い靴底で、綺麗に磨かれた地下街の床を削って、走っていた。混乱していたのだろうか、いつまでたっても息が切れる感じがしなかった。

憤激が、喉の奥を焼け爛れさせていた。

彼が負けた。

（彼が負けた！）

心の中で、そう叫ぶ。心の中でしか叫べない。実体としての口は、ただただ意味のない雑音を発し続けていたから。

それが嗚咽でないことを願って、私は顔を上げた。いつ階段を通過したのか、地上だった。ビルが見える。空が見える。

誰もが逆らえない何者かが、見える。

私は、顔を抑えて、うずくまった。もしかしたら、彼が死んでい
ることを願っていた。

1 褪せることのできない子供の色

1 褪せることのできない子供の色

僕の小学校には特進クラスという選抜クラスがあつて、それは成績優秀者を集めて中学受験をする生徒を中心に質の高い教育を行うという数少ない自校のセールスポイントだった。

もっとも特進とは名ばかりで、実際に有名中学を受験する生徒の数はクラスの五分の一に満たない。一学年六クラスあつて、一つに二十五名ほどが属するから、たった五人ほどこしか今年も受験する子供はいない。その五人だつてきつと形だけの特進用授業過程なんてものより、塾や家庭教師を信頼して勉強に励んでいるのだろう。

それらは、別にどうだつていいことだった。大人になつたらいずれ皆就職して働かなくちゃいけない、それと同じくらいにどうでもいい。

問題は、僕がその特進クラスに入ってしまったことだった。

僕は三年生のときに転校してきて、三年間で苦手な「友達作り」もなんとかやり遂げて、平和に暮らしている最中だった。生活が安定してきて、ついつい余力を使つてしまったのだろう、昨年五年生の成績は自分でも不思議なほどに高い。

四年五年と少しずつ増やしてきた「友人」は一人も特進クラスには選ばれず、僕はまた一人で教室に入らなければならなかった。あと一年。六年生の一年で、また適当に友達を作つてなんてのは重労働過ぎる。

大体特進クラスのメンバーはほとんど固定されていて、そのほかのクラスのように年度が変わることに目まぐるしく入れ替わったりはしない。特進とそれ以外は、別々の学校のようにでもあった。

始業式が終わつて、帰りの会という下校前のクラスでの集会――要はつまらない時間を迎えて僕はだらりと足を伸ばして椅子に座つ

ていた。最後尾の席からはほとんどクラス全員の生徒の姿と、黒板の前で明日からの予定を話す若い教師が一望できる。

「どうもこいつも、知らないやつらばかり。知らなければ知らないままでも構わない、というのはどうやら一般的ではないらしくて、互いの物理的距離の短さがみじくなればなるほど、そしてその距離を保つ時間が長ければ長いほど、互いに必然性のない干渉をしたがる生き物が小学生なのだと既に僕は悟っている、気分だけはあるざつと見回しても、小学生達だな、と印象でも何でも無い唯の確認めいたことしか思い浮かばない。男子、女子、女子、女子、男子、女子……若干女子が多めか。」

その中から、僕はある後姿に目を留めた。息を止めた。軽く俯いて、肘をついた手に顎を乗せている。小柄で、しかし身長は僕と同じくらいか。

何をしているわけでもない。薄く儂い呼吸を繰り返しているその女子生徒は、何度か廊下で見かけたことがあった。

悪魔。それが、勝手に心の中で彼女につけていたあだ名だった。なんとなく普段の立ち振る舞いが、鋭く賢しい。そんな印象で決めたあだ名である。

彼女は去年まで同じクラスにはならなかったものの、僕と同じく一般クラスに所属していた。すると、珍しく途中からこの特進クラスに入ったうちの二人が僕と彼女ということになる。

「起立」

教師の張りのある声に、一斉に子供達が立ち上がった。

僕は少し遅れて椅子を蹴り、慌てて礼をした。

僕の親はやり手のクソツタレだった。年収は悪くない。僕を含めた兄弟三人は既に大学の費用すら保証されている。中古で買ったという家は広いし、手入れはしていないが池付きの庭まである。

僕は末っ子で、小学六年生。一番上は兄で大学一年。挟まれて真ん中にいるのが、中学二年の姉だ。

兄は親——母のことを気持ち悪いくらいに慕っており、離れた大
学に通うようになっても下宿しろという母の命令を頑として聞かず、
自宅に居座り続けて休日などには母の買物に必ずついていく。僕
や姉が母を悪く言うと言わなく殴る。体育会系でないのが唯一の救
いだと姉はいつもそう話す。

姉は、カビと昆虫の死体が合体したような性格の兄と違って明る
い。誰に対してもというのは言いすぎだとしても、嫌味なく、快活
にしていることが多い。時々見ているほうが耐えられなくなるよう
な乾燥した笑みを浮かべてぼうつとしている。それを知っているの
は、僕だけだ。

姉は母を哀れな人と評する。自覚的に生きられなかった愚かな
人間だと。その意味は良く分からなかったが、姉はいつも難しい言
葉を使う。そのせいで僕もだんだん年齢にそぐわない語彙ばかりが
増えてきている。

見下されていることが分かっているのだろう。母は姉と口をきか
ない。たまに僕に姉に対する罵詈雑言を並べて押し付ける。

僕はといえば、一応見かけの上ではまともな関係を保っているつ
もりである。心の中ではクソツタレと呼んでいるが、舌を動かすと
きは最大限努力して、すぐにもつれそうになる柔らかな肉を「母さ
ん」という発音の形にもっていく。

どこにでもある家庭であり、特殊なのは父がいないことくらいか。
それだって珍しいものではない。

どこから話せばいいのか……どこから話しても受け入れられない
話っているのはたくさんあるし、例えば親がいくら懇切丁寧に子供
を生んだ理由を説明して見せても、大抵自己愛以外だとは納得でき
ない。

ともかく、印象的な場面からにしようか。

悪魔の名前は朝倉瑞穂。僕と違って世渡りの才能を持ち合わせて

いる。

特進クラスに一人で移ってきたことについては僕と同じ彼女だが、ミズホは一ヶ月もするとクラスの大体の女子と見掛けの上では友人らしく馴染んでいた。昼食の時間など女子は彼女を中心としたグループと、それ以外の孤独な数人に分かれる。ほとんどの女子はミズホと共にシチューなりコッペパンなりを胃に収めるわけだ。

その間僕は、教師の目を盗んで半分以上捨てた給食をさつと食べ終えて、自分の机の上に本を広げる。

「論理哲学論」「旧約聖書」「神々の指紋」「ランボー詩集」……ほとんど意味の分からない難解なものばかり、毎日一冊は持っている。大体は文庫本で、少し古い紙の匂いが落ち着くと同時に時間の感覚を曖昧にする。

本は、姉から借りている物だった。姉の自室には部屋の大きさに全くつりあっていない本棚が存在し、そこにはそんな本ばかりが詰まっている。自由に出入りして勝手に取り出していいと、姉は僕が三年生の頃に言ってくれた。

そして時々、彼女のほうへと視線を向ける。機敏で時に大胆で、明るく理知的。人気者になる条件のすべてが彼女にはある。

そうしていつものように彼女をちらりと見ると、まるでタイミンクを合わせる練習でもしていたかのように彼女がさつとこちらを向いた。

驚いて、ついそれが表情にも出てしまう。彼女にはそれがはっきり分かっただろう。

だが何も言わず、ミズホは元の女子とのおしゃべりに戻っていた。

それが五月の終わりのことで、その次の日が僕の刺された日になる。

僕とミスホは苗字が五十音順で近い。

男女差別の撤廃という大義名分の下に色々と行われたわけのわからない活動の一環か、僕の小学校の名簿は男女混交にいつの間にか変わっていた。入学当初は別々だったのだけれど。

そういうことで、僕はその日ミスホとの何度目かの日直だった。

日直は一日二人で、教室に関わる雑事を押し付けられる言わば交代制の家政婦みたいな物だ。授業が終わった後の黒板の文字を消して次の授業に備えることなどが主な仕事で、「後始末の重要性」を教育現場で唱える大人の尻拭いが基本的な業務。

放課後には花瓶の水を替えて、日誌を書いて職員室に提出する。

十分ほど前までは耳障りなほどの嬌声を上げていたクラスの住人達も今は帰路に着くか、体育館やグラウンドなどで遊びに興じている。教室は内臓をくりぬかれた死体みたいに物足りない静寂が支配を広げていた。

差し込む日の光は傾いてはいるもののまだまだ元気に白っぽい光を机や黒板に反射させている。ミスホは黒板を消しているところだった。僕は日誌。

といっても書くことなんてない。基本的には他愛のない一日の感想を書けばいいのだが、そんな難しいことは偶然特進に入ってしまった馬鹿な僕には難しかった。散々悩んだ上で「素敵な一日だった」と汚い字で一文書いて日誌を閉じる。

あとは顔を上げてなんと無しに黒板の前をくると移動しているミスホの後姿を見ていた。肩を過ぎるくらいの髪は日の光に透けて暖かい色を散らしている。肌は紫外線を浴びたことなどないかのように白い。つやをちょうど良く抑えた陶器のようである。

背はほんの少し低めか。標準的な身長 of 僕よりは男女の差が少し低いくらい。

と、その場でミスホがターンする。猫と鷹を思わせる綺麗な顔が僕のほうを向いた。

「終わった」

言わなくても分かることを言う。

「こつちも」

短く答えて、僕は席を立った。ランドセルに片腕だけ通して彼女の横を通り過ぎようと歩き出す。

「日誌、出しとくから。さよなら」

もう帰っていいよという意味で告げて、そのまま歩く。

それで終わりのはずだったんだけど、日誌を持った僕の手首が冷たい柔らかさに包まれて、強制的に止められる。

「古見君」

名前まで呼ばれた。仕方ないので、振り向いて対応する。

「何？」

ミズホは特に笑っても怒ってもいなかった。淡泊な表情を貼り付けたまま僕の腕を引き寄せて、顔を近づけてくる。やがて、僕とミズホの顔はあと二十センチほど突き出すだけで頭突き合戦になる位置まで来て止まった。

「話すの、初めてだよね」

狭い路地を冬の風が通り抜けるときに立てそうな音。彼女の声はそういうものを連想させた。

「そうだね」

そうとしか答えようがない。これまで廊下ですれ違うことはあっても話したことはない。

「いつも一人でいるね」

「うん」

「友達は？」

「他のクラスに数人」

「今でも遊んだりする？」

「あんまり」

「忘れられてると思う？」

「多分そうじゃないかなって言われてみれば思うよ」

尋問が一旦止む。何か考えるようにミズホは視線を彷徨わせた。

（なんだろう）

疑問は頭の中で膨らんでいたが、ミズホが近くにいて触れられているその感覚にあまり冷静ではいられない。平静さを保っているように見せかけつつ、僕は次の言葉を待った。

「いつもさ、古見君、楽しい？」

その問いは、予想外だった。好きな食べ物とかなら、野菜以外つて答えられたのに。

僕は少しだけ黙って、それから首を振った。

「知らないよ。考えたことないから」

ミズホはその受け答えに、形のいい目を見開いて驚いたような顔になった。

「じゃあ」

声と共に、彼女は更に接近してきて――

「う、わ？」

変な声が出てしまう。ミズホは僕の背中に手を回して肩の辺りに顔押し付けていた。抱きついてきたと表現してもいいだろうか。

「例えばさ、私や皆が君をいじめたりしたら？ 無視したりどこかに閉じ込めたり教科書捨てたり」

一拍置く。

「さあ」

息をするのと同じに、軽く疑問で答えた。

「さあって？」

「だから知らないって。考えることないから」

またしばし沈黙。

ミズホの表情は今は見えない。僕の安物のシャツに顔を当てていて、整った形状の頭部しか窺えない。

「古見君、さあ」

そのままぐもった声でミズホは噛み締めるように声を出していく。

「好きな人とか、いるの？」

「好きな人？」

どういう意味だろう。変わった子だとは感じていたけど、いつもクラスで見せている雰囲気は今の彼女にはあまり残っておらず、より先鋭化したような感じだった。

「そ。誰でもいい、学校とか、家族とか、だれか好きな人」

よく女子がキヤーキヤー言ってるような類の「好きな人」の話ではないようだった。

ミズホからそういう話を持ちかけられなかったことにほんの少し落胆する。おもしろそうなんだけど。

「いないよ」

と、嘘で返しておく。ミズホのことは保留としても、姉は好きだった。

「そう。寂しくない？」

「それも考えたこと」

ない、というとした。少なくともそれは嘘ではなかった。

だけど、突然脇腹に走った衝撃に声が詰まった。はじめは叩かれたかと思った。握り拳の尖った部分を半端な力で押し付けたような感触だったのだ。

すぐにそれが間違いだと気づく。自分で痛む場所を触ってみて、拳より固い感触とぬるい体液の心地が痛みの中でぐるぐるまわる。

「古見君、今、楽しい？」

「さあ。痛くて、考えられないから」

ミズホが僕から離れた。同時に僕の右脇腹の辺りから何かが床に落ちて小さな音を立てる。

はさみだった。しなびた文房具屋が百円均一にでも売っていそうな、安っぽいプラスチックの握り手とあまり切れなさそうな金属の刃を持つはさみ。

傷は多分、浅い。そのときになってようやく僕は自分が刺されたと気がついた。

「ずるいね、古見君」

不満げに眉を寄せてミズホが呟く。はさみは何センチも刺さらな

かつたらしい。血もそれほど出てはならず、強い打撲のような刺激だけが頭に響く。

「私さ、このクラスで一番幸せそうな人を殺してやろうって思ったんだけど」

はあ、と溜息を挟む。

「古見君はずるいよ。一番幸せそうで、一番不幸そう」

「ごめん」

「なんで謝るの？」

「自分より優れた人間の期待に応えるために努力しろ、って前に読んだ本に書いてあったから」

「そっか」

何を納得してくれたのかは分からないが、彼女はようやくその顔にいつもの勝気な笑みを戻した。自分のランドセルを背負って、手を振ってくる。

「またね、古見君。日誌はお願い」

軽い音を立てて廊下を走り去ってしまう。後に残された僕は、ポケットのハンカチで血を拭って、改めて日誌を出すために足を動かし始めた。

穴の開いたシャツと、赤黒く染まってしまった小鳥の描かれたハンカチをどうしようか考えながら家に帰ることになり、僕はミスホのことをその日のうちに深く考えることはしなかった。血のついたはさみは、持って帰って近所のどぶに捨てた。

2 考えて生きることのできない背約者達

2 考えて生きることのできない背約者達

「古見君」

夢の中で名前を呼ばれて僕は振り返った。ミズホがそこにいる。

ミズホとは小学校を卒業して以来ともに話もしていない。脇腹に小さな傷跡だけを残して、彼女は僕のことなんか忘れたみたい。また僕とは別の世界で生きている。

その彼女が、僕の名前を読んでいる。こみくん、と小さな口が繰り返す。

何で彼女が出てくるんだろう。僕だって、それほどミズホの事を意識して暮らしているわけじゃない。中学に上がって、それなりに生きていくのに必死なだけだ。

「古見君、楽しい？」

よく見ればその姿は、小学生のときのミズホだった。今よりほんの少しだけ背が低く、発音にも幼さが残る。

「ねえ、古見君——」

三度名前を呼ばれて、その後に続く言葉を聞きたくなかった僕はミズホにがむしゃらに接近して腕を振るった。華奢な彼女が曖昧な殴られ方をして、どこかに消える。

「考えてないって言っただろ」

目が覚める。その気配に喉をかきむしった。

覚醒と同時にベッドから転がり落ちて、背中を強かに打ちつける。痛みが治まるまで、荒れ狂う嵐のような耳の中の雑音とも戦う。

一息ついて、起き上がる。うなされるのは久しぶりだった。

寝巻きが破れたりしていないかと心配になって、腕を上げたり背

中に手を回したりして調べるが、どうやら無事のようだった。薄桃色のシャツとズボンは、シンプルなデザインながらよく見れば男物ではないと分かる。ボタンの取り付けが左右逆で、袖口などのデザインも丸みを帯びて柔らかい。

自分で選んだものではない。姉さんが、僕が中学に入るときに譲ってくれた物だった。前の寝巻きが小さくなっていたので買い換えようと思っていたのだが面倒で、次の朝着替える手間を省くと言って制服で寝ようとしていたらお古を何着かくれたのだ。

思わぬ収穫に僕は喜んだ。姉はいつもは作り物みたいな綺麗な笑顔を少し困った物にして、「変態だねえ」と呟いていた。

机の隅においてある洗面用具（洗面所においておくとヒステリーを起こした母が片端から捨てたりするのだ）を持って、鼻歌交じりに一階へと降りる。洗面台の鏡に線の細い男が映った。

「やあ、おはよう」

おはようシスコン野郎。鏡の中の僕はいつも愛想よく微笑んで罵倒する。オリジナルに似ているな。

家の中は静謐に満ちていた。家族の中で最も早く起きるのは僕、のように、実は姉が一番早い。部屋からは出てこないが、いつも暗いうちから起き上がり、本の世界に遅刻ぎりぎりまで浸っている。それでいて夜は日付が変わっても起きているのだから、いつ寝ているのか分からない。

そんな生活ながら目元にクマ一つ作らない姉は、もしかしたら人間ではないのかもしれない。突飛な考えだが、僕にしたって大勢の周りの人間と自分がどこかで決定的にずれていることを知っている。姉が魂を持った人形であっても驚くには値しないだろう。

滴る臓物や生存のための極彩色の欲求が、姉には似合わない。セルロイドやレジン、リチウムやプラチナ、アルミニウム。それらが姉の主成分だったとして、納得することしか出来ないだろう。

トースターに食パンを二枚放り込んで、焼いている間に卵を焼く。下手糞な目玉焼きとベーコンが焼けるころにはパンはとっくにトー

スターの中で跳ね上がった焼き終わっている。後は残り物の野菜と先ほどの卵、ベーコンを適当にのせる。マーガリンを塗るのを忘れたが、まあ、いいだろう。

買いだめしてある野菜ジュースをコップに注ぎ、二人分の玩具みたいな朝食を持って再び二階へ。姉の部屋は僕の部屋の向かいにある。

いつも、食事は各自部屋で摂る。母は食事時にはテレビをつけて、ことあるごとに番組や出演者を馬鹿にしたり文句を言ったりしている。そのくせ決してテレビ無しでは生活しないのだ。やがてテレビに飽きると、しつこく父の罵倒を繰り返し、ちゃらんぼらんな人生論や自分が如何に苦労しているかを語る。

兄以外の家族、つまり僕と姉は早々にそんな食卓へは見切りをつけて、それぞれ部屋で食べる。何年も前からそうだった。

「姉さん、おはよう」

扉の前で囁く。小さな声でも、朝の姉は聞き逃さない。

「起きてるよ。入って」

いわれて、僕はドアの取っ手を掴んで静かに回した。紙の匂いと姉の香りがかすかに鼻腔を刺激する。

姉の部屋は狭くも広くもない。入り口から向かって左、部屋の半分が大きな本棚二つに占領され、残りはベッドと机、そして部屋の全床面積からすればおよそ四分の一ほどの何も無い空間。

姉はベッドの上で、窓から入る朝日を受けて読書中だった。

その容姿は、一級の人形職人が変質的に、もしくは偏執的に己が全生涯と技術を賭けて作り上げた作品のようだった。美麗だが、どこか狂氣的である。

薄く開いた目が僅かにこちらを向く。長く伸びた髪は腰の辺りまであり、決して膨れ上がったりせずしなやかに体に絡み付いている。鏡面の向こうに落とし込まれた世界……。

僕は夢想して、身を震わせた。部屋の右側で座している姉には一かけらの現実感もない。それが鏡像であるかのごとく、虚ろに鎮座

しているだけだ。本当は、この部屋の左側にこそベッドと彼女がいるのではないだろうか。

薄手の白い寝巻き、手に持った本――山田正紀だ。姉の目は本から離れて僕を見続けている。

殺人犯が目の前にいるような不可解さと焦燥を一瞬だけ感じる。いつものことだった。姉は僕に優しい。だが、僕は姉を慕う一方でどうしようもなく彼女が怖い。怖くてたまらない。静かな自宅、大学に入っても母の背中に張り付き猫撫で声を上げ続ける兄や、しょっちゅう頭痛だと言って不機嫌に唸り声を上げながら居間で転がる母、時折意識の隅に顔をのぞかせる覚えていないはずの父の顔、そんな色々なものの中で、最も恐ろしい。

「朝ごはん、今日はトーストだけだ」

張り付く喉を誤魔化して、僕はそう戸口で呟いた。

「有難う。こつち、おいで」

手で招かれて、僕は姉の隣に座った。姉は本を置いて小さな机をベッドの前に移動させる。

いつものことだった。僕が朝食を持ってきて、一緒に食べる。姉は食事に文句を言ったことがないので用意する側としては逆に美味しいのだろうかと不安になる。

僕といるときの姉は、微笑か苦笑か、あるいは微苦笑を浮かべている。普段の、学校なんかで見せている「世間向きの」快活な笑顔はなりを潜めて、深い洞察と感受性が浮き出た落ち着きのある顔ばかりしている。

姉は中学三年、僕は今年。二つしか変わらない少女であり、歳相応の見た目ではあるのだが、その所作や浮かべた表情のせいかなと大人びて見える。

「あれは？」

姉が訊いてきた。あれとは僕等の間での母を指す言葉だ。

「まだ寝てる。起きてこないうちに家を出たほうがいいかもね。昨日は遅くまでわめいてたし」

「そう」

淡泊に、食事が続けられる。あまり会話はない。だが、充溢した時間ではある。

基本的に、姉との時間は充実している。ミズホとの時間は、充実とか空虚とかそういうことが考えられない時間で満たされている。

僕は何より先に、大多数の人間と肩を並べることに違和感を覚える、腐った猛禽みたいな人間だから。

……なんでミズホがいない時間を語るのか。それはとても難しい問題かもしれない。でも、ミズホ、誰だって、誰かのことを語るのにその人そのものだけでつてのは、難しいものだよ。僕の姉だって、他の誰だって、君が生きている限り接した世界の面積は、君を楽に語りきっている。

そうだろう？

さて、続きはどこからにしようか。やっぱりインパクトが欲しいかな。そのほうがミズホにも分かりやすいだろうし。

僕が知っている姉は聡明で理知そのもので、この世の人間から奪い去った価値で形成されているように見える。

色々覚えている。例えばいくつまで風呂を共にしていたとか、昔読んでもらった絵本のないようだとか、一緒に入った布団の中での息遣いや肌の匂い。

言葉。具体的な記憶。

それらがどうであれ、最後に見たものは変わらない。血まみれの肢体は肌の色と血液の色、それから淡い色合いのサマーセーターが美しい幾何学模様を描き出していた。

腹の傷が最も大きく、壊れかけの財布のように開いたそこからいろいろと漏れ出している。

肌の匂い。それが、一番強く残っている――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323j/>

えすのはなし

2010年10月8日12時55分発行